

師範試験実施要項

▽第六十五次漢字部課題

○漢字部 次の作品三点〔何れも半切35cm×135cmに揮毫〕を提出する

・規定《書体 楷書》

延年壽千秋（魏・甄后「塘上行」）

読 延年壽千秋・年を延べて寿千秋なれ

註 千年までも命長く生きること。

・臨書 孫過庭 書譜 十六字

当仁者得意忘言 罕陳其要企學者希風

読 仁に当る者は、意を得て言を忘れ、其の要を陳ぶること罕なり。企ち

学ぶ者は、風を希い

・随意《書体 行草書》

山腹引泉因煮茗 嶺頭乘雨爲栽松

（釋善住）

読 山腹泉を引いて因つて茗を煮 嶺頭雨に乗じて為に松を栽ゆ

註 山の中腹を流れる泉をくんで茶を煎じ、雨が降つて来たので峰の頂上に松を植える。●山腹 山の中腹。●煮茗 茶を煎じること。

●嶺頭 峰の頂上。

▽第六十五次かな部課題

○かな部 次の作品三点〔半切35cm×135cmに揮毫〕を提出する

・規定《書体自由》

わたの原漕ぎ出でて見ればひさかたの雲居にまがふ沖つ白波

註 海原に漕ぎ出して遠望すると、（ひさかたの）空の雲と一つになり、見わけもつかない沖の白波よ。

・臨書 関戸本古今集（伝 藤原行成）

こひすればわがみはかげとなりけりさりとてひとにそはぬものゆゑ

・随意《書体自由》

蚊ばしらや棗の花の散るあたり（加藤暁台）

註 「蚊ばしら」夏の夕暮、棗の細かな白い花の散るあたりに、蚊柱がたっている、の意。おだやかな夏の夕べの情趣である。

▼第二十三次詩文書部課題

次の作品三点〔何れも半切35cm×135cmに揮毫〕を提出する ※形式は縦作品に限る

・規定《原文を尊重すること》

湯の町の葉ざくら暗きまがり坂曲り下れば溪川の見ゆ（若山牧水）

・臨書（いろは歌）いろは歌を半切に揮毫、得意な古法帖（限定はしない）にて。全部ひらがなでもよい。

いろ（色）はにほ（匂）へどち（散）りぬるを

わ（我）がよ（世）たれ（誰）ぞつね（常）ならむ

うる（有為）のおくやま（奥山）けふ（今日）こ（越）えて

あさ（浅）きゆめ（夢）み（見）じゑひ（酔）もせず

・随意《原文を尊重すること》

蟬の空松籟塵を漲らし（川端茅舎）

註 「蟬」蟬の声が空に響く。松を吹く風が乾いた土ばかりをしきりに舞い上げている、の意。初夏の乾燥した空気を伝える句。

― 受験についての注意 ―

一、受験資格 漢字・かな・詩文書とも準師範。但し、『日本書道院展（二回以上）出品経験者』で、満二十才以上であること（二〇〇四年四月一日生まれまで認める）。

一、受験料 一万二千元（漢字・かな・詩文書の別）受験料は作品と別封とし、振替にて同時に本院宛に送付のこと。

一、本院主催の日本書道院展に二回以上出品の者（部門不問）。第七二回展出品も可。毎日書道展出品も考慮する。

一、受験者は師範受験申請書を作品と共に提出のこと。

一、申請書は、返信料として84円切手を添えて本部へ請求のこと。

一、漢字部・かな部・詩文書部合格者は認定料として七万円納入のこと。その証として認定証を授与する。認定証の姓号は申請書の姓号によって作成する。

一、切 十月二十日 発表十二月号

一、作品には申請書に添付の出品票を使用して準師範になった年月（日本書道誌発表の月）を記入して貼付すること。又、作品の左下隅にも同じく鉛筆で段位・支部名・氏名を記入のこと。

一、不合格者（規定違反も同じ）はその氏名を発表しない。

一、師範試験作品は白画仙紙を用い、封書に必ず「師範応募」と朱書のこと。

◎なお、(1) 試験の結果をお知らせするため、返信用封筒（切手貼付、宛名、住所明記のもの）を同封のこと。

(2) 提出した作品は一切返却しない。

◎月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

◎出品作品には雅印押印のこと。

◎受験者の事情により一点又は二点のみを本年受験し、三年以内に三点受験することもできる（受験料はその都度一万二千円）。

▼第八次硬筆部課題

次の課題を（硬筆用紙）に書いたものを三点提出する

・規定《楷書》

白水満時雙鷺下 緑槐高處一蝉吟（宋 蘇軾）

読||白水 満つる時 双鷺下り 緑槐 高き処 一蝉吟ず

註||清らかな水が満ちてくると二羽の鷺が舞い下り、緑につつまれた槐の木の梢には、一匹の蝉が鳴いている。

・随意《原文を尊重すること 書体自由》

ほうほう螢来い そのほかない美しさはいつの時代でも 人の心をとらえます。

・臨書 高野切第三種（伝 紀貫之）

ひとこふることをおもにとおもひもて あふこなきこそわびしかりけれ

― 受験についての注意 ―

一、受験資格 準師範

一、受験料 八千円 受験料は作品と別封とし、振替にて同時に本院宛に送付のこと。

一、受験者は師範受験申請書を作品と共に提出のこと。

申請書は、返送料として84円切手を添えて本部へ請求のこと。

一、合格者には認定証を交付する。但し登録料として五万円納入のこと。認定証の番号は申請書の番号によって作成する。

一、切 十月二十日 発表十二月号

一、作品には申請書に添付の出品票を使用して準師範になった年月（日本書道誌発表の月）を記入して貼付すること。

一、不合格者（規定違反も同じ）はその氏名を発表しない。

一、師範試験作品は硬筆用紙を用い、封書に必ず「師範応募」と朱書のこと。

◎なお、(1) 試験の結果をお知らせするため、返信用封筒（切手貼付、宛名、住所明記のもの）を同封のこと。

(2) 提出した作品は一切返却しない。

◎月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

準師範試験実施要項

▼第七十四次漢字部・かな部課題

○漢字部 次の作品二点（何れも半切35cm×135cmに揮毫）を提出する

・規定《書体 行草書》

長樂鐘聲花外盡 龍池柳色雨中深 「唐」錢起

読||長樂の鐘声 花外に尽き 龍池の柳色 雨中に深し

註||長樂宮の鐘の音は、花のはるか彼方まで届いて消え、竜池のほとりの柳の色は、雨に洗われてますます深くなる。

・臨書 集王聖教序（王羲之）十六字

蒼生罪而還福湿火宅之乾燄（焰）共拔迷途

読||蒼生は罪せらるるも福に還る。火宅の乾焰を湿らせ、共に迷途より抜く。

○かな部 次の作品二点（半切35cm×135cmに揮毫）を提出する

・規定《書体自由》

淡路島かよふ千鳥の鳴く声に幾夜ねざめぬ須磨の関守（源 兼昌）

註||淡路島から海を渡ってくる千鳥の鳴く声のために、幾夜も眠りから覚めたことであろう、須磨の関守は。

・臨書 高野切第三種（伝 紀貫之）

やまがはのおとにのみきくもゝしきをみをはやながらみるよしもがな

▼第四十四次詩文書部課題

次の作品二点（何れも半切35cm×135cmに揮毫）を提出する ※形式は縦作品に限る

・規定《原文を尊重すること》

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮（松尾芭蕉）

註||秋の暮「枯枝」は枯死した木の枝。「秋の暮」は秋の終りの意ではなく秋の夕暮の意。初めは「とまりたるや」と字余りで漢文調であった。寒鴉枯木の趣きを詠んだもの。

・臨書（北海王元詳造像記）五字

願母子平安

読||がんしほしのへいあん

― 受験についての注意 ―

一、受験資格 漢字・かな・詩文書とも六段。但し『日本書道院展出品経験者』で、

満十八才以上であること（二〇〇六年四月一日生まれまで認める）。

一、受験料 八千円（漢字・かな・詩文書の別）受験料は作品と別封とし、振替にて本院宛に送付のこと。

一、本院主催の日本書道院展に一回以上出品の者（部門不問）。第七二回展出品も可。毎日書道展出品も考慮する。

一、切 十月二十日 発表十二月号

一、作品には申請書に貼付の出品票を使用して六段になった年月（日本書道誌発表の月）を必ず記入して添付すること。又、作品の左下隅にも同じく鉛筆で段位・支部名・氏名を記入のこと。

一、不合格者（規定違反も同じ）はその氏名を発表しない。

一、受験作品は白画仙紙を用い、準師範受験申請書を作品と共に提出のこと。また、封書には必ず「準師範応募」と朱書のこと。

一、準師範受験申請書は、返信料84円切手を添えて本部へ請求のこと。

一、提出した作品は一切返却しない。

◎月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

◎出品作品には雅印押印のこと。

◎師範受験時には日本書道院展出品が二回以上必要となる。受験の際は注意すること。

▼第十六次硬筆部課題

次の課題を（硬筆用紙）に書いたものを二点提出する

・規定《書体自由》

夏も近づく八十八夜野にも山にも若葉が茂る。爽やかな風の中で。

・臨書 蘭亭序（王羲之）十六字

況脩短随化、終期於尽。古人云、死生亦大

読|| 況んや脩短は化に随いて、終に尽くるに期するをや。古人云う、死生も亦大

註|| まして、命の長短は物の変化に従い、ついに尽きるのに決まっているのである。古人は、死生もまた大切なことである

一、受験料 五千円

一、準師範受験申請書は、返信料84円切手を添えて本部へ請求のこと。

一、切 十月二十日 発表十二月号

一、作品には申請書に貼付の出品票を使用して六段になった年月（日本書道誌発表の月）を必ず記入して添付すること。また、封書には必ず「準師範応募」と朱書のこと。

◎月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

昇段・級試験実施要項

▼第一三三次漢字部・かな部課題

第一部 「半切35cm×135cm」次の漢字又は、かな（各書体自由）を半切の場合、縦に揮毫したものの一点

○漢字部

○数局棋中消永日 一樽酒裏送残春（季中）

読|| 数局の棋中永日を消し 一樽の酒裏残春を送る

註|| 囲碁を打って長い一日を過ごし、酒を飲みながら春を送る。

●棋|| 囲碁。●残春|| 春の末。

○かな部

○ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる（藤原実定）

註|| ほととぎすの鳴いた方角を眺めると、明け方の空にはただ有明の月だけが残っているなあ。

一、受験資格 漢字・かなとも二級以上のもの。

一、受験料 一点につき 四千円。

一、成績により六段以下の相当級に編入する。

漢字・かな受験者の事情により昇段試験の課題（漢字・かな）を半切1/2（35cm×68cm）に二点（書体《書風》を変えるか縦・横にする）揮毫しても受験することが出来る。ただし、現在二級・一級・初段・二段の人は一点でもよい。

第二部 「半紙」次の漢字（楷書）又は、かな（書体自由）を半紙に揮毫したものの一点

○漢字部

○撥雲尋道

読|| くもをはらいみちをたずぬ

註|| 雲を押し開いて道をさがす。山中に遊ぶという語。

○かな部

○音に聞く高師の涙のあだ浪はかけじや袖の濡れもこそすれ（祐子内親王家紀伊）

註|| 噂に高く聞いている高師の涙のあだ波、そのような評判の浮気なあなたのは、心にかけますまい。わたしの袖は、つらい涙で、濡れるようにもなりますから。

一、受験資格

漢字・かなとも二級以下のもの（漢字作品には支部名・級・氏名（号）を競書と同じく筆によって揮毫する。かなの場合は名（号）又は雅印を捺したうえに、左下隅に鉛筆で級と支部名、姓号を記入する。）

一、受験料 一点につき 千五百円。

一、成績により一級以下の相当級に編入する。

▼第四十四次詩文書部課題

○第一部 「半切」次の俳句〔原文を尊重すること〕半切35cm×135cmに揮毫したもの一点

※形式は半切の場合は縦作品に限る

○菜の花のゆきどまりなり法隆寺（内藤鳴雪）

註Ⅱ 「菜の花」千古の偉容をみせる法隆寺の外は田園の風景である。一面の菜の花の中を道が法隆寺へ続いているのである。平穩な古都の春の景が描かれている。

一、受験資格 二級以上のもの。

二、受験料 一点につき 四千円。

一、成績により六段以下の相当級に編入する。

詩文書受験者の事情により昇段試験の課題を半切1・2（35cm×68cm）に二点（書体〈書風〉を変えるか縦・横にする）揮毫しても受験することができる。ただし、現在二級・一級・初段・二段の人は一点でもよい。

○第二部 「半紙」次の俳句（原文を尊重すること）を半紙に揮毫したものの一点

※形式は縦作品に限る

○襟まきに首引入て冬の月（杉山杉風）

註Ⅱ 「冬の月」寒さに首を襟巻の中に引つ込めて、冴えた月を仰いだことだ、の意。

一、受験資格 二級以下のもの。

二、受験料 一点につき 千五百円。

一、成績により一級以下の相当級に編入する。

新 書例集刊行

日本書道院役員、審査委員の作品

日本書道院展公募一科、並びに同人。

毎日書道展公募サイズ、一尺×六尺、二・四尺×五尺のサイズ

漢字・かな・詩文書二〇八点掲載

一、A4判 上製本

一、会員配布 五〇〇〇円 送料込

▼第十八次硬筆部・昇段・級試験課題

○応用部 次の課題を「硬筆用紙」に書いたもの一点

・涼風のそよぐ木陰のベンチに腰をおろして語らう 爽やかな光景。

一、受験資格 一級以上のもの。

二、受験料 一点につき 三千円。

一、成績により六段以下の相当級に編入する。

○基礎部 次の課題を「硬筆用紙」に書いたもの一点。

・夏空にむくむくとわき立つ入道雲 詩歌や俳句では「雲の峰」と詠む。

一、受験資格 二級以下のもの 作品には支部名・級・氏名（号）を競書と同じく硬筆用紙に書く。

二、受験料 一点につき 千五百円。

一、成績により一級以下の相当級に編入する。

― 出品についての注意 ―

一、〆切 十月二十日 発表十二月号

一、作品には十月号発表の競書成績の段級と支部名又は府県名、氏名又は号を書いた小票（たて11センチ×よこ4センチ・競書用出品券使用可）を作品の左下に貼付する。又作品左下隅にも同じく鉛筆で段級・支部名・氏名を記入する。硬筆部は『硬筆用紙』に記入する「級のなものは新とすること」。

一、漢字部・かな部・詩文書部の一級以上の者は第一部「半切」へ、『硬筆部は応用部・硬筆用紙で』出品のこと。

一、各部で昇級できなかった者は氏名を発表しない（規定違反も同じ）。

一、昇級試験の作品は競書作品と別にし、必ず封書に「昇試」と朱書のこと。

一、受験料は振替にて作品と同時に送付のこと。

一、提出した作品は一切返却しない。

◎月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

◎「半切・半紙」出品作品には雅印押印の習慣をつけること。